

14) 蕪村の貧居八詠と歯の関係

Studies Buson and Dentistry

医の博物館 西巻明彦

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*

蕪村の貧居八詠は、安永6年以前と推定され、杜甫の「秋興八首」などの漢詩にならった連作と言われる。「愚に耐よと窓を暗うす雪の竹」、「かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥」、「我のみの柴折くべるそば湯哉」、「紙ぶすま折目正しくあはれ也」、「氷る燈の油うかゞふ鼠かな」、「炭取のひさご火桶に並び居る」、「我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴らす」、「齒豁に筆の氷を噛ム夜哉」の八句で、最後に歯と関係する発句でしめくくられている。

貧しさを詠んだ詩で有名なものに、山上憶良の「貧窮問答歌」がある。「風雑え 雨降る夜の 雨雑え 雪降る夜は 術もなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつづしろひ 糟湯酒うち啜ろひて 咳かひ 鼻びしびしに しかあらぬ 鬚かき撫でて 我を除きて 人ら在らじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り 布肩衣 有りのことごと 服襲へども 寒き夜すらを 我よりも 貧き人の 父母は 飢ゑ寒ゆらむ 妻子どもは 吟ひ位くらむ 此の時は 如何に しつつか 汝が世は渡る

天地は 広しといへど 吾が爲は 狭くやなりぬる 日月は 明しといへど 吾が爲は 照りや 給はぬ 人皆か 吾のみや然る わくらばに 人とはあるを 人並に 吾のみや然る わくらばに 人とはあるを 人並に 吾も作るを 綿も無き 布肩衣の 海松の如のわけさがれる 檻樓のみ 肩にうち懸け 伏盧の 曲盧の内に 直立に 藁解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に囲み居て 憂へ吟ひ 竈には 火気ふき 立てず こしきには 蜘蛛の巣かきて 飯炊く 事も忘れて 鵲鳥の 呻吟ひ居るに いとのきて 短き物を 端きると 云へるが如く 楚取る 里長さが声は 寝屋戸まで 来立ち呼ばひぬ 斯くばかり 術無きものか 世間の道」とある。

また、杜甫の石壕の吏は、「暮に投ず石壕村 吏有り」と夜に人を捉う 老翁かきをこえて走り 老婦門を出でて見る 吏の呼ぶこと一に何で怒れる

婦の啼くこと 一に何ぞ苦しめる 婦の前みて詞を致すを聴くに 三男は鄴城の戍り 一男書を附して至り 二男新たに戦死す 存する者は且く生を偷む 死せる者は長しえに已んぬ 室中更に人無く 惟だ乳下の孫のみ有り 孫の母の未だ去らざる有るも 出入に完裙無し 老嫗力は衰うと雖も 請う吏に従いて夜帰せん 急に河陽の役に應ぜば 猶お晨炊に備わるを得んと 夜久しくして 語声絶え 泣きて幽咽するを聞くが如し 天明前途に登り 独り老翁と別る」と記述している。

日本の文芸は、一般に抒情文芸とよばれ、感情が言語によって律動的に表現された美的世界である。和歌は、日本の抒情文芸の代表的なもので、感情の律動的表現体の純粋な相をあらわしている。つまり、感動の世界でもあり、余情の世界でもある。實方清氏は、「表現によって多くの歌風が生じ、その代表的なものとして万葉風、古今風及び新古今風の三世界を形成しているのである。これは別に心を重んじる表現・詞を重んじる表現及び心と詞との三つの表現論的立場として認められる。また別に歌の本質内容に即して考えてみると、感動を中心とした表現・観照を中心とした表現及び象徴を中心とした表現に於てみることができる。」と述べている。

この感動を中心とした感動的世界には、万葉の時代には、柿本人麿がおり、観照的世界の中心には、山部赤人、山上憶良がいる。山部赤人は、自然観照に秀いで、一方山上憶良は、人生観照にみるべきものがある。憶良の人生観照は、人間生活を観察し、生、老、病、死、貧などを主題に取り挙げている。この概念の延長として考えるならば、杜甫の「石壕の吏」も、蕪村の「貧居八詠」もこの人生観照ととらえることができる。蕪村の「貧居八詠」は、「齒豁に筆の氷を噛ム夜哉」でしめくくられている。今回、このような人生観照と歯とは、どのような関係性があるのか、考察を行った。